セレウコス朝及びアルシャク朝支配下の バビロニアにおける知事職

Provincial Governor in Seleucid and Aršakid Babylonia

三津間 康 幸^{*}
MITSUMA Yasuyuki

ABSTRACT The aim of the present paper is to clarify the position and function of the official called the “Governor of Akkad (Babylonia)” (LB: ^{l6}*mu-ma-’i-ir* / ^{l6}GAL. UKKIN ^{kur}URI^{ki}, with variants) in the Seleucid and Aršakid Empires in the period from 305/4 to 61/0 B. C., the end of the period covered in the Astronomical Diaries, the main source of my research.

Under Seleucid rule (305/4-141/0 B. C.), at least until the mid-third century B. C., the Governor was probably in charge of the financial administration of Babylonia. Although the commander of the military forces in Babylonia was the “General (of Akkad),” the transportation of munitions was also under the control of the Governor. The “(Royal) Appointees (in Akkad)” (LB: ^{l6}*paq-du*^{meš} [] šā LUGAL / ^{l6}*paq-du*^{meš} šā *ina* ^{kur}URI^{ki}) probably had the role of assisting the Governor in his work.

Under Aršakid rule (141/0-61/0 B. C.), it is notable that the Governor frequently visited the “King’s encampment” (*madakti šarri*) (probably his residence during progresses to Babylonia), while neither the General (of Akkad) nor the “General who is above the Four Generals” did so. (The latter official was the Governor General of Upper Satrapies under Seleucid rule, but under Aršakid rule the territory controlled by him was probably limited to Babylonia.) At least until the 120’s, the loyalty of Greco-Macedonian cities and of generals / vassal kings was in question. Therefore, at least during this time, the King probably tried to build a close relation to the Governor and / or appointed his trusted subordinates to that office in order to keep these elements under control.

I. はじめに

(1)
以前の拙稿で筆者は、セレウコス Seleucos 朝支配下 (前 305/4-前 141/0 年) 及びアルシャク Aršak 朝支配下 (前 141/0-前 61/0 年) の属州バビロニア (アッカド Akkad) 統

^{*} 東京大学大学院博士課程, 日本学術振興会特別研究員
Ph. D. student, The University of Tokyo / Research Fellow of JSPS

(2)
治体制の研究の手始めとして、前 61/0 年までの記録が残るアッカド語史料「バビロン天文日誌（以下日誌）」に言及されるバビロニア駐在の諸將軍職について研究した。それに
(3)
加えて同時代の「アッカドの知事 ¹⁰mu-ma-'i-ir / ¹⁰GAL.UKKIN ^{kur}URI^{ki}」職の動向につ
(4)
いても若干の紙数を割いて考察したが、なお論じつくせなかった点も多い。

筆者が「知事」と訳す単語の表記は ¹⁰GAL.UKKIN / ¹⁰mu-ma-'i-ir であるが、これらは
(5)
アッカド語動詞 *ma'aru* の D 語幹（「統治する」の意味を持つ）分詞 *mu'erru* / *muma''eru*
(6)
の連語形（status constructus）であり、スミスによってサトラップ（ギリシャ語ではサ
トラペース *σατραπης*）に相当するアッカド語とされた（ただし、彼は ¹⁰GAL.UKKIN を
(7)
rab puhri と転写）。ベントゾンも、セレウコス朝におけるサトラップの存在を様々な史
料を駆使して実証する中で、*muma''eru* はサトラップであるとしている。筆者もこの立
(8)
場に異存はない。しかし、その帝国内での地位や権限については今のところ定説はない
といってよい。

(9)
ビッカーマンはセレウコス朝支配下の「サトラップ」の権限について「軍事権と民政
権を併せ持つ」と主張した。しかし彼は「この名称を一属州の長について便宜的に pour
la commodité ce titre au chef d'une province」用いたのであり、サトラペースと呼ばれ
る者のみを指してはいない。実際、「軍事権」の根拠として彼の掲げる 3 つの事例（2
Maccabees 8 8; Plin. *HN* VI 152; Polyb. V 43 5）は、いずれも留保なしにサトラップの事
(10)
例と見なせるものではない。彼は例外的に早い時期に公開されていた前 274/3 年の日誌
(11)
（[表 1] の事例 iv）もオットーの引用を通じて参照するが、オットーが同時にこの事例
(12)
における「將軍 ¹⁰GAL *û-qu*（ストラテegos）」の王への直属（オットーは直後に現れる
(13)
「王の軍隊 ¹⁰ERÎN LUGAL」と合わせて將軍の呼称を「王の軍隊の將軍」と取るが、こ
(14)
の句は目的語と解釈し、「將軍は王の軍隊を [集め]」とするべきであろう）を主張して
いることに関しては何も述べていない。

(15)
一方ベントゾンはアンティオコス Antiochus III 世時代（前 222/1-前 187/6 年）など
の例外を除けばサトラップによる属州統治こそセレウコス朝の基本的な属州管理の形態
であったとする一方、事例 iv などに依拠して前 3 世紀の半ばにはバビロニアを初めとす
るいくつかの属州で属州駐在の帝国軍が「属州の全般的な行政の指導者 die Leiter der
allgemeinen Verwaltung」たるサトラップの全般的な属州管理から分離してストラテ
egos の指揮下に入っていたとした。また、同事例に依拠してサトラップは属州の財政管
理責任者とみなされるとした。更に、ディアドコイ時代の事例に依拠して属州において
全般的な裁判権を行使していたとも推測した。そして、アンティオコス III 世の改革によ
ってストラテegos がサトラップの権限を併せて属州の単一の総督として統治したが、
いくつかの属州では、サトラップ職は同王の死後再び現れたと主張した。事例 iv につい

ては筆者も以前ベントゾンに従って「当時の『知事』は属州の財政等の権限を握っていたが、軍隊の指揮権は『知事』から分離していたこともこの記事から推測できる」と書いたが、この事例における「将軍」と「知事」の関係はより詳しく検討されるべき余地を残している。

また、近年ではデル・モンテが日誌の「月の出来事」の部分を集成し注釈を付す作業を通じて、日誌中のサトラップ（アッカドの知事）や諸將軍職の権限・地位について検討した。ベントゾン同様、事例 iv からサトラップと「将軍」の間の民政的権限と軍事的権限の分掌を導き出した彼は、その後の時代の日誌の中のいくつかの記述を活用し、少なくともアンティオコス III 世時代からサトラップの地位の下落が起こったとし、彼が属州の軍事職と見なした「4 将軍の上に立つアッカドの将軍」への権限の委譲を描き出そうと試みている。しかし筆者が既に論じたように、この呼称や、「4 将軍の上に立つ将軍」、「4 知事の上に立つアッカドの将軍」のような呼称（筆者はこれらの呼称群の代表となる呼称を「4 将軍の上に立つ将軍」とする）で呼ばれる職は、属州の軍事職ではなく、セレウコス朝のユーフラテス以東の諸属州（上部属州）を管領する「上部属州総督」と同定される。属州の軍隊を指揮しているのは「（アッカドの）将軍」である。諸將軍職とサトラップとの関係を論じる際の前提となる諸將軍職の位置づけが、デル・モンテの説明では不正確であり、きちんとした前提に立った再検討が必要といえるであろう。

また、ストラテゴスとサトラップを別々の職として扱わず、交換可能な名称とみなす意見も近年主張されてきた。シャーウィン・ホワイトとクルトは、セレウコス朝のサトラップに当たる官職はギリシャ語テキストではストラテゴスと表記されたと考え、その権限については、事例 iv から財政権を導き出す他、彼らが単にメディアのサトラップと見なす（異論については註10参照）モローンのアンティオコス III 世即位直後の反乱（Polyb. V 41-54）の例を援用して軍隊の召集や指揮も可能であったとし、グレインジャーは、サトラップの官名はセレウコス朝時代には公式にはストラテゴスに代替されたと主張する。

上記の諸研究に共通する問題点としては、デル・モンテの研究を除けば主にギリシャ語の叙述史料・碑文などに依拠するものであり、近年刊行された『バビロン天文日誌』のようなアッカド語の一次史料を十分に活用してはいないことが挙げられよう。史料の少なさから、一部の属州の事例を安易に広範囲に適用する傾向も見られる。また、アルシャク朝時代の史料まで視野に入れているのはデル・モンテの研究のみで、それとてアルシャク朝時代の「アッカドの知事」職の動向に関しては詳しく検討していないのである。

本稿では先行諸研究の以上のような問題点を踏まえ、サトラップの中でも属州バビロ

ニアの「知事（サトラップ）」、つまり「アッカドの知事」職に対象を限定して、軍事との関わりを含めた権限やその地位について、アルシャク朝時代まで通して検討を行いたい。それは、「上部属州総督（4将軍の上に立つ将軍）」や、属州の軍隊を指揮する「（アッカドの）将軍」⁽²³⁾との関係を明確にすることにもつながる。主な史料は日誌であるが、バビロニア年代誌、ギリシャ語史料も重要な情報を含んでいる。

II. セレウコス朝時代の「アッカドの知事」職

セレウコス朝及びアルシャク朝時代の日誌、バビロニア年代誌、ギリシャ語叙述史料から「アッカドの知事」及びそれに類する職に関する記述を抽出して（表1）を作成した。⁽²⁴⁾年代の下限は日誌の残存する前61/0年までとした。将軍職についての同様の表（三津間『オリエント』45-2, [表1]）の中の事例（通し番号はアラビア数字）も本稿ではしばしば引用するので、それらと区別するために、通し番号にはローマ数字を用いた。

一つ注意が必要なのは、「アッカドの知事」が管轄する属州バビロニアの範囲には時代によって変化があるということである。元来両河地方は北のメソポタミアと南のバビロニアの2属州に分かれていたが、シャーウィン・ホワイトとクルート⁽²⁵⁾によれば、アンティオコスIII世の即位までにメソポタミアからはパラポタミア *Παραποταμία* (Polyb. V 48 16)、バビロニアからは「沿エリュトラ海 *ἡ περὶ τὴν Ερυθρὰν θάλατταν* (Polyb. V 48 13)」, アポッローニアータイス *Ἀπολλωνιάτις* (Polyb. V 43 8; 44 6) の各地域が属州に昇格し、5属州となった。これらの名はモローンの反乱を記述したポリュビオスの記事に見える。パラポタミアはドゥラ・エウローポス *Dura Europos* を中心とするユーフラテスの中流地域、「沿エリュトラ海」はかつての「海の国」、つまりベルシャ湾頭であり、アポッローニアータイスはバビロニアからメディアへ通ずる重要な交通路である大ホラーサーン *Khurāsān* 道が通るディヤラ *Diyala* 川流域が領域であり、かつてのシッタケーネー *Sittacene* ⁽²⁶⁾ に対応する。⁽²⁷⁾

属州パラポタミアに関しては、121年にドゥラ・エウローポス郊外のバリガ *Paliga* で書かれた羊皮紙文書に、「メソポタミアとパラポタミアのストラテegos・マネーソスの: *Μανήσου (中略) στρατηγού Μεσοποταμίας καὶ Παραποταμίας* (*PDura no.20 4-5*)」という形で言及されている。アンティオコスIII世の時代とは300年以上の隔たりがあるとはいえ、アルシャク朝時代の史料からその存在が裏付けられることの意味は大きい。しかし、日誌からは上記のような属州の分割を跡付けることは難しい。「アッカドの知事」という呼称には変化は見られないし、バビロンのマルドゥク神殿エサギラ *Esagila* に属すると思⁽²⁸⁾われる書記達によって書かれた日誌での「アッカドの知事」の記述は、バビロンやティグリス西岸のセレウキア *Seleucia* に関する出来事を取り上げる例が多いから、管轄地域

の縮小という事態があったとしても、それは日誌の記述に反映されていないのである。

時代によって面積の広狭はあったにせよ、属州バビロニアにおいてはサトラップに比定される「アッカドの知事」と属州のストラテegosに比定される「(アッカドの) 将軍」は前1世紀まで並存しており⁽²⁹⁾ (ただし、アンティオコスIII世時代にも「アッカドの知事」職が存在したのかどうかは不明である)⁽³⁰⁾、筆者も既に示したとおり両者が同じ粘土板中に言及される例もしばしばである。ゆえに、ストラテegosとサトラップを交換可能な名称と見なす主張は、少なくともこの属州に関しては当てはまらない。

「(アッカドの) 将軍」や「4将軍の上に立つ将軍 (上部属州総督)」が王によって任免されることは筆者が既に論じたとおりである。一方「アッカドの知事」が確実に王から任命を受けたという事例は今のところ見当たらない。事例 xxvi から任命者は分らない。しかし、アッピアーノスの記述 (事例 viii) が、ティマルコス Timarchos がメディアの他にバビロニアのサトラペースを兼ねていたことを示すものならば、⁽³²⁾「アッカドの知事」もまた王に任命される存在であったと考えることができる。

セレウコス朝時代の「アッカドの知事」の権限について記す数少ない史料が、前 274/3 年の日誌に記述された事例 iii と iv (事例 2) である。

(事例 iii) : アンティオコス (I 世) とセレウコス, (王達) の37年 (セレウコス紀元: 前 275/4 年) XII 月 9 日, 36 (前 276/5) 年にサルディス (^{kur}Sa-par-du) へ, 王の方へ行ったアッカドの知事と王の ⁽³³⁾paqdu 達がティグリス河畔の王の都市セレウキアに戻った。彼らの皮の書簡がバビロンの住民達 (^{lu}DUMU^{meš} E^{ki})⁽³⁴⁾ に来た。12 日, バビロンの住民達はセレウキアへ出て行った。⁽³⁵⁾この月, アッカドの知事は, 32 (前 280/79) 年に王の命令でバビロンの人々 (^{lu}E^{ka-meš}), ホルシッパの人々 (^{lu}Bar-sip^{ki-meš})⁽³⁶⁾, クタの人々 (^{lu}GÚ.DU^{ki}A^{meš}) へ支給されていた諸地及び, 王の命令で諸 [市] と諸祠堂 [に与えられ] 住民達の自由にされていた牡牛達, 羊達, 全てのものを, 国庫の [収税 / 徴収 対象と] した⁽³⁷⁾ (-273B 'Rev. 34'-38: 括弧内筆者)。

(事例 iv) : (前 274/3 年) XII 月 24 日, アッカドの知事は, バビロンと王の都市セレウキアから大量の銀, 服, 財産, 器具⁽³⁸⁾を, そしてバクトリアの知事が王に送ってきた20頭の象を, 川向こう (シリア) へ, 王の方へ送り出し, XII 月, この月, その初めからその終わりまで将軍はアッカドにいる王の軍隊を集め, 王の援助のために I 月川向こうへ行った (-273B 'Rev. 30'-32: 括弧内筆者)。

事例 v は本稿で検討する時代において唯一「アッカドの知事」の名が判明する例である。

アッカドの知事⁽³⁹⁾テーローンとアッカドにおける ⁽³⁹⁾paqdu 達である人々の列席の [もとに...] (-261C 'Rev. 9')

この事例では「アッカドの知事」と「paqdu (任命された者) 達」が一緒に言及されてい

る。そして、このことは先に引用した事例 iii とも共通している。事例 iii に現れる「王の *paqdu* 達 ^{ia} *paq-du* ^{me} ['] *ša* LUGAL」という呼称からは、彼らがおそらく王によって任命される職であったこと、事例 v の「アッカドにおける *paqdu* 達 ^{ia} *paq-du* ^{meš} *ša* *ina* ^{kur} URI^{ku}」という呼称からは、このような「*paqdu* 達」が「アッカドの知事」の管掌している属州バビロニアで何らかの職務を遂行する職であったことがうかがえる。「アッカドの知事」と共に言及されることから、何らかの形で「アッカドの知事」を補佐する職であったことも推測できる。

事例 iii や iv から、ベントゾン⁽⁴⁰⁾に従って「アッカドの知事」を属州の財政管理責任者としてみることに特には問題はなからう。ファン・デル・スベクは事例 iii (前275/4年)における「アッカドの知事」の措置を、前 274/3 年に勃発するブトレマイオス朝との第 1 次シリア戦争 (cf. -273B 'Rev. 29'-30') に備えた戦時課税の一種と見なしている。⁽⁴¹⁾ この解釈が正しいとするならば、前 274/3 年にバビロンやセレウキアから物資を送った (事例 iv) だけでなく、その徴収を監督したのも「アッカドの知事」であると推測できる。

一方事例 2 (事例 iv) で「将軍」が行った軍隊の召集及び指揮に関しては、「アッカドの知事」は関与していない。しかし、「バクトリア Bactria の知事」や「アッカドの知事」は象20頭の輸送に携わっており、後者がセレウキアやバビロンから送った物資の中には「器具 *unātu*」のように「装備、軍装」と解釈されうるものも見える。⁽⁴²⁾ 記事の記述している状況が戦時であることを考慮すれば、シリアに送られた象や「器具 (装備)」は戦争のために用いられるものであったと考えられる。つまり、当時のバビロニアにおいては、兵員の召集及び指揮について「将軍」は全権を与えられていたが、「将軍」が軍事に関わることを全てを掌握しているわけではなく、兵站などの分野では「知事」が関与していたと考えられる。

また、セレウコス朝時代以降は「アッカドの知事」が軍隊の指揮に関与した事例は見られないが、「ディアドコイ年代誌 (Grayson, *op. cit.* [註 6], Chronicle 10)」には、アレクサンドロス III 世の兄弟であるフィリッポス Philippos III 世の 6 年 (前 318/7 年) の出来事として、

VI 月、アッカドの知事 (セレウコス) は … […]⁽⁴³⁾ の包囲を […], そしてアッカドの全軍を配置した (Obv. 10'-11': 括弧内筆者)

とあるように、ディアドコイ時代のバビロニアでは「知事」が軍隊をも掌握していた。事例 iv (事例 2) に見られる「将軍」と王とが直結しているような軍隊の指揮系統がその当時の常態であったのか、それとも戦時の体制であって、平時には「アッカドの知事」の管理下に「(アッカドの) 将軍」及び軍隊が置かれていたのか、という問題には早急な答えを出すことは難しい。また、「上部属州総督」がこの時点で「アッカドの知事」らの

活動に具体的にどのように関与していたのかも、これらの事例からはよく分からない。

しかし、さらに時代を下って前 230/29 年（事例 4：-229B 'Obv.' 9'）には、「上部属州総督」に対するアッカド語の呼称として、「4 将軍位の家の[?]将軍」[^h]GAL ERÍN^{meš} šz É 4^h GAL ERÍN^{meš}-a-tu という呼称が現れる。これは「4 将軍の上に立つ将軍」と同じような意味を持つと思われる呼称で、日誌中の「4 将軍の上に立つ将軍」に類する呼称群（その中に現れる「4」という数はその後セレウコス朝の衰退や属州分割にも関わらず一定で、広域を支配したバビロニアやハカーマニシュ朝の王達が名乗ってきた「四方世界の王 šar kibrat erbetti」⁽⁴⁴⁾という称号から書記が連想して「上部属州総督」の広範な管轄地域を示した定型表現と思われる）の最初のものである。例えばセレウコス I 世の共同統治者として「上部属州総督」を務めたアンティオコス I 世は同時代（前 294/3-281/0 年）のアッカド語史料では「王達 LUGAL^{meš}」の 1 人とされている。⁽⁴⁶⁾「4 将軍」という語句は「4 知事」と置き換えられることもあり（事例 vii 参照）、「知事」はバビロニアやバクトリアのような一つの属州を担当する官職である。「4 将軍（位）の上に立つ / 家の[?]」という語句が「上部属州総督」に対する呼称の中で使用されるようになったことは、少なくとも前 230/29 年までに、上部属州の各属州を担当するストラテゴス達、少なくとも書記の地元であるバビロニア担当の「（アッカドの）将軍」が「上部属州総督」に直接下属するような位置に置かれたことを示すものと思われる。

しかし、そのことは即「（アッカドの）将軍」職が「アッカドの知事」の上長となったことを意味するわけではない。例えば、「4 知事の上に立つアッカドの将軍」という「上部属州総督」の呼称が現れるのは前 179/8 年（事例 7 [事例 vii]）のことである。この呼称中の「アッカドの」は「アッカドの将軍」の兼任を示していると思われるが、この事例は、⁽⁴⁷⁾デル・モンテが主張するような、単なる属州バビロニアの軍事職への「知事」職の権限付与を示すわけではなく、複数の属州を管領する「上部属州総督」に「知事」職が直接下属していることを示しているのである。つまり、少なくとも前 179/8 年頃まで、「アッカドの知事」と「（アッカドの）将軍」は別々に「上部属州総督」に下属していたと考えられるのである。しかし、「アッカドの知事」がどのような権限を行使していたのかについては、前 274/3 年（事例 iv）、前 262/1 年（事例 v）以降は具体的な情報が欠如しているために不明である。また、前 179/8 年（事例 vii）よりも後の時代においては、「4 知事の上に立つ」といったような語句は「4 将軍の上に立つ将軍」の呼称群の中に現れなくなるために、「アッカドの知事」職と「上部属州総督」の間の関係についてもよく分からなくなってしまう。もっとも、「アッカドの知事」職の重要性が著しく低下したわけではない。前 224/3 年の事例 vi には、⁽⁴⁹⁾

[n 月], この [月] 14 日, 彼の名を [Lu[?]] という王セレウコスの兄弟がオロン

⁽⁵⁰⁾
テス河畔の〔アンティオ〕キア、王の陣営から、川向こうからティグリス川と王
の運河沿いの王の〔都市セレウキアに入った。…〕邦の〔知〕事と邦の民 (¹⁰UN^{mes}
⁽⁵¹⁾
KUR) は彼の前に出て行って樂を〔奏した〕 (Grayson, *op. cit.* [註6], Chronicle 13b
11'-15')

とある。この事例の「邦の知事」とは、バビロンにいる書記の視点からみれば「アッカドの知事」のことであろう。そしてその人物は王の兄弟のセレウキア入市に関係する儀礼に参加している。このような場面において、「アッカドの知事」が登場し、「(アッカドの) 將軍」が登場しないということは、単なる偶然かもしれないが、依然「アッカドの知事」が属州の要職の少なくとも一つとして活動していたことは示していると思われる。

また、アンティオコスIII世時代以降においても、デル・モンテがいうような「アッカドの知事」の地位の低下や（以前の拙稿⁽⁵²⁾ではその可能性を指摘した）権限の縮小を示すような明確な兆候は見出せない。以前の拙稿⁽⁵³⁾でも指摘したように、事例 17 (-144 'Obv. 36'-37') で「アッカドの將軍」が行った人口調査は差し迫った対エリュマイス戦争のための徴兵に関する措置であったと考えられ、従前から「アッカドの知事」に属していた権限を掌握したとはいえない。また、事例 11 (-161A₁₊₂ 'Obv.' 22'-27') から、「(アッカドの) 將軍」が何らかの裁判に関わっていたことは推測できるが、そこから「(アッカドの) 知事」からの司法権の移動を導き出すことは難しい。軍事裁判権のようなものが行使された可能性も否定はできないし、セレウコス朝時代の属州バビロニアにおける司法権⁽⁵⁴⁾については、史料の不足のために、「アッカドの知事」がそれを行使したのかどうかを含め、決定的なことを述べるのが難しいからである。

III. アルシャク朝時代の「アッカドの知事」職

アルシャク朝時代における「アッカドの知事」の活動に関することで象徴的なのは、「アッカドの知事」は「王の陣営」との関係を持っているが將軍職にはそのような事例が見られないことである（「大將軍」が言及される事例 81 における「〔…の⁷〕陣営 *ma-dak* [𒌦𒍪]」が「王の陣営」であった可能性はある）。

アルシャク朝時代における「王の陣営」に関する記述として、前 133/2 年 XII 月の日誌に、「この月、王の陣営へ入っていた船団がメ⁽⁵⁵⁾〔セーネー〕⁽⁵⁶⁾まで〔…〕⁽⁵⁷⁾と見える。ここでは「王の陣営」はメセーネ Mesene と繋がる河のほとりに置かれていたと思われる。この年のⅦ月には、ティグリス河畔のある港がセレウコス朝支配下のメセーネ（沿エリュトラ海）のサトラップ、アスパシネー⁽⁵⁸⁾ *Aspasinē* によって襲撃されるという事件が起きており (-132B Rev. 18-20)、このような「王の陣営」の設置と関連があるのかもしれない。しかし、そのアッカド語での名称は *karāš šarri* であるから、この「王の陣営」

は以下の全ての「王の陣営 *madakti šarri*」とは異なるものと考えねばなるまい。

前 130/29 年 I 月（事例 xv）の日誌には、

[...] この月 4 日、アッカドの知事が王の陣営からバビロンに入った。[...] (彼らは王の皮の書簡によって王の陣営へ出て行った。[...] 市民達が王の皮の書簡によって王の陣営へ出て行った。[...] バビロンから、彼らの [...] (複数) は王 [...] に向かって⁷ 出て行った。私は次のように聞いた: 22 日, [...] の [...] (単数) は王の [陣営] へ行った (-129A₁ 'Obv.' 6'-10': 括弧内筆者)

とあり、翌 II 月の日誌はその後の経緯を伝えている（事例 xvi）。

この月 10 日、アッカドの知事が [...] か [...] 王の皮の書簡によってバビロン市の長官職に任命されたバビロンにおける市民達の 1 人が王の陣営からバビロン² に² に入った。エサギラの議長とエサギラの議会の [バビロンの] 人々はこのバビロン市の長官に 1 頭の牡牛と 3 頭の [犠牲獣 (羊)] を [エサギラの] 大門カ-シキラで [用意した] (-129A₂ 'Obv.' 16'-18': 括弧内筆者)

さらに前 125/4 年 VIII 月の日誌にも、次のような記述がある（事例 xxi）。

[...] と] アッカドの [知] 事が王の陣 [営] からティグリス河畔のセレウキアに入った (-124B 'Obv.' 4')。

また、前 97/6 年 I 月の日誌にも、少し欠損しているが同様の記述（事例 xxviii）がある (-96A 'Flake' 12'-13')。ここでは「王の陣営」からセレウキアに入った者の官名はかなり欠損している ([...UR] I^{ki}) が、他の例から判断して、「アッカドの知事」と復元できよう。遡って前 138/7 年 X 月の日誌（事例 x）にも、「この月 5 日、[王の]² 陣営² から [...] ところのアッカドの知事が [...] (-137D Rev.' 22)」とあり、上掲の諸例から、ここでも「王の陣営」が言及されていると推測できる。

セレウコス朝時代の年代誌では、アンティオキア Antiochia を「王の陣営」と呼んでいる記述も見られた（事例 vi: Grayson, *op. cit.* [註 6], Chronicle 13b 12') が、上に掲げた事例 x 以下の諸例では、「王の陣営」が都市を指すような記述は見られない。また、これらの事例は王がバビロニアにやって来た時のことを記述しているように思われる。⁽⁵⁹⁾ 王がメディアやヒュルカニア Hyrcania に在った場合には日誌ではそれらの地名がはつきり示される一方、「王の陣営」という言葉は使われないし、事例 xv は、「アッカドの知事」やバビロンからのものを含むいくつかの集団または個人が王の書簡によって次々と「王の陣営」を訪れていることを示しているからである。つまり、これらの例に言及される「王の陣営 *madakti šarri*」は書記の地元であるバビロニアへの巡（行）幸中の王の居所として機能したと考えられる。⁽⁶¹⁾

事例 xv および xvi に言及された、どこかの「市民達」¹⁶ *pi-li-ta-an* (Gr. *πολιται*: おそらく

ギリシャ・マケドニア系の集団)」、バビロンからの何らかの集団、「バビロン市の長官¹⁰ *pa-ḫat E^k*」に任命されたバビロン「市民達¹⁰ *pu-li-ta-an*」の1人などを除けば「王の陣営」に赴いたことが確認できるのは「アッカドの知事」のみであり、王と「アッカドの知事」職との緊密な関係がうかがえる。例えば事例 xv および xvi において、様々な人々が「王の陣営」に召集される前後に「王の陣営」に出入りした「アッカドの知事」は、そこで行われたと見られる「バビロン市の長官」の任命などの重要事に関して王と協議を行った可能性もある。また、事例 xxi と同じ前 125/4 年Ⅷ月には、当時セレウコス朝から自立していたメセーネー王アスパシネーの王子が「(恐らくは父のバビロニアでの)王位のため *ana LUGAL-ḫa*」の贈り物を持ってバビロニアに入り、その後セレウキアに、恐らくは「アッカドの將軍」のもとに行った(事例 52 [-124B 'Obv.' 2'-6'])が、IX月アルタバーン Artabān I 世の命によって捕縛・送還された⁽⁶²⁾。同じ將軍にアスパシネーが書簡を送ったことがX月の事例 53 (-124B 'Rev.' 12'-13') から知られ、この將軍とメセーネーが親密であったことが分かる。この送還の直前に「アッカドの知事」はセレウキアに行っており、おそらくこの措置に関する王命の執行者であった(事例 xxii)。

一方、將軍職にはこれらと匹敵するような事例が確認されず、任免の時以外に將軍職と王が関係を持った事例はほとんど見当たらないといってよい。アルシャク朝のバビロニア征服の記事中の事例 20 (前 141/0 年Ⅲ月) が唯一の例と思われるが、ここでは、以前から王と関係があったのがアンティオコスなのかアルヤボージャンなのかは不明である。

24日、以前王アルシャク […ところの] アッシリア […] 王アルヤボージャンの息子アンティオコスはアッカドの4將軍位の[上に(立つ將軍に)] 任命された。庭園…。…(単数)は王の都市[セレウキア]に入った。この月28日、[…] 大王⁽⁶⁴⁾に任命された[アルシャク]はセレウキアからバビロンに入った (-140A: 'Rev. 7'-9')。

バビロニアの軍隊を指揮する「(アッカドの)將軍」⁽⁶⁵⁾と正規の「4將軍の上に立つ將軍」⁽⁶⁶⁾は前120年代後半に至るまで、少なくとも前130年代までは皆ギリシャ名を持っており、アンティオコスのように属王の一族である者もいた。ただし、前 127/6 年 XII 月の事例 50 には、「[…バガ] ヤシャ⁷ [の息子²] が4將軍(の上に立つ將軍)を務めた: [... *Ā² ša² Ba²-ga²*]-ia-a-šā ā-še-pīš 4¹⁰ GAL ERĪN^[meš]」とも読める部分がある (-126B 'Rev. 2': 括弧内筆者)。類似の表現からみて、バガヤシャの息子は「4將軍の上に立つ將軍」職の代行と考えられる⁽⁶⁸⁾。バガヤシャは当時の王アルタバーン I 世の甥である先王フラハート Frahāt II 世 (Just. *Epit.* XXXXII 2) の兄弟であった(下に訳出する事例 40 [-132B Rev. 21-23] 参照)。前 120/19 年の事例 56, 58 (-119C 'Obv. 11'-12') からバガヤシャの息子

である人物が「4 将軍の上に立つ将軍」を解任されたことが知られる。しかし、この人物が前 127/6 年に「4 将軍の上に立つ将軍」を代行していたにせよ、その時点ではあくまで代行であり、前110年代以降「大將軍」職が専らイラン名の人物によって占められる状況⁽⁶⁹⁾と比べれば、バビロニアにおけるアルシャク朝権力は未だ弱い状態に置かれていたと思われる。

事例 20 における「[...] 大王²に任命された [アルシャク]: [...^mAršā]-ka-a LUGAL² GAL-ā mun-nu-ā」という語句 (-140A 'Rev. 9') についてフンガーは、人名 [...] -ka-a の後のサインが「LUGAL に似ているが必ずしも同一ではない」としている (ADRTB 3, 138) が、この粘土板の写真 (ADRTB 3, Pl.196) からは LUGAL のサインが確認できるように思われる。また、同じ注釈の中でフンガーは、続く GAL-ā (大いなる) の後の *munnu* (任命された) が王に使われるのには相応しくないとしているが、このアルシャク朝のバビロニア征服の時点において、ミフルダート Mihrdāt I 世 (アルシャク) がセレウキア・バビロンに無血入城していることから見て、セレウキア及びバビロンの「市民」のような集団から王に推薦される形が取られたことも考えられるのではなからうか。この語句を「大王² [アルシャク] の [...] に任命された [...]」と取り、王自身ではなく王の臣下の任命を表すものと解釈することもできるが、ミフルダート I 世の「大王」という呼称は楔形文字文書では他に見られず、彼の臣下を表す時にわざわざ使われる表現とは思われない。実際、事例 23 では「4 将軍の上に立つ将軍」アンティオコス⁽⁷⁰⁾は「王アルシャクの代理」と呼ばれている (-140C Obv. 37: 傍点筆者)。当時、諸将軍職にギリシャ名を持つギリシャ・マケドニア系と思われる者が多く任命されていたことは、王権側の彼らの勢力に対する配慮の表われとも取れる。前 141/0 年 IX 月にエリュマイス Elymais の侵攻を迎え撃つためにセレウキアを出発した「4 将軍の上に立つ将軍」アンティオコス (事例 23 [-140C Obv. 35ff.] 参照) の翌 X 月におけるエリュマイスとの通謀 (事例 24) に対処するセレウキア「市民」の行動は、当時の彼らの勢威を示している。

この月私は次のように聞いた: 4 日、ティグリス河畔のセレウキアの市民達は呪い
を 4 将軍の上に立つ将軍アンティオコスに対して置いた。彼がエリュマイス人と合
意に達したゆえに。彼らは [別]⁽⁷¹⁾の将軍を任命し、エリュマイス人に対して戦うた
めに多くの軍隊を彼と共に送り出した。彼らはこのアンティオコスを引き止めたが、
彼は僅かな軍隊と共に逃亡した (-140C 'Rev. 29'-33')。

また、前 134/3 年 XII 月の事例 38 (事例 xii) には、

この [月] アッカドの知事は [...] から [...] この [アッカドの知事] はティグ
リス河畔のセレウキアに向かってバビロンから出て行った。こ [の月] 28 日, [4 将
軍の上に立つ将軍] ピリーノスがセレウキア [から] バビロンの上流の王セレウコ

スの城壁の下に來たがバビロンに入らなかった (-133B Rev.' 18-20)

とあり、前 133/2 年Ⅶ月の事例 40 には、

この月私は次のように聞いた: I 月にメディアの都市 (複数) へ、王の兄弟バガヤ
シャの前へ行った 4 將軍の上に立つアッカドの將軍ピリーノス⁽⁷²⁾が—このように私
は聞いた—アッカドの將軍職から解任された (-132B Rev. 21-23)

と記されている。前 134/3 年は閏年で XII₂ 月が挿入されるので、「4 將軍の上に立つ將軍」と「アッカドの將軍」を兼任していると思われるピリーノス Philinos の行動には 1 ヶ月の空白がある。前 133/2 年 I 月の事例 39 には「[...] 4 將軍の上 [に立つ將軍] がバビロンから [...]」⁽⁷³⁾とあり、彼がこの月にはバビロンに入市した可能性も否定はできない。しかし、事例 38, 40 はいずれも異常な事態を示し、2 つの事例の間に連関がある可能性は十分にある。現地勢力との不和などの理由でピリーノスがバビロニアに留まれなくなった可能性もある。

更に、前 120 年代に入ると、バビロニアはアンティオコスⅦ世⁽⁷⁴⁾ (前 130/29 年⁷-前 129/8 年⁽⁷⁵⁾)、ついでメセーネー王アスパシネー (前 128/7 年⁸-前 127/6 年Ⅷ月) によって占領されている。メセーネーはその後も「アッカドの將軍」と関係を深めていた (事例 52, 53)。王と「アッカドの知事」との関わりは、このようにバビロニアにおけるアルシャク朝の支配が不安定であった前 130-120 年代に多く見られる。当時のアルシャク朝王権はバビロニアにおける王権を強化するために、自らの近臣を「アッカドの知事」に任命する、もしくは同職に就いている者と近しい関係を作り上げる、といった方策を取ったのではなかろうか。

IV. ま と め

事例 iv からは、前 274/3 年当時、「アッカドの知事」は属州の財政管理の他に、戦時の兵站などをも担っていたことが明らかになった。「アッカドの知事」と共に「*paqdu* (任命された者) 達」の存在も前 262/1 年まで確認された。この時代の「(アッカドの) 將軍」と「アッカドの知事」の関係はよく分からないが、少なくとも前 230/29 年 (事例 4) までにはセレウコス朝の上部諸属州の各「將軍」職は「アッカドの知事」と並んで「上部属州総督」に直接下属するような位置に置かれるようになっていたと思われる。前 179/8 年 (事例 vii) よりも後の時代には、「アッカドの知事」職と「(アッカドの) 將軍」職、「上部属州総督」の間の機構上の関係については再びよく分からなくなるが、「アッカドの知事」の地位が著しく低下したようには見えない。

アルシャク朝時代における「アッカドの知事」と王とのかなり緊密な関係は、「(アッカドの) 將軍」やそれを兼ねる者など、バビロニアにおいて軍隊を指揮する者達と王と

の間柄とは対照的である。特にアルシヤク朝王権が未だ弱体で、軍隊を掌握する將軍達や都市、属王の相互の確執や反乱、外患の絶えなかった前 130-120 年代にかけて、王は自らの近臣を「アッカドの知事」に任命したり、「アッカドの知事」と近い関係を作り上げたり、といった形でバビロニアの統治に関与したのではなかろうか。

これまでの研究において、「4 將軍の上に立つ將軍（上部属州総督）」「大將軍」「アッカドの知事」「（アッカドの）將軍」といった、属州バビロニアにおいて、そして上部属州において最高位に位置する一群の官職の権限や地位を少しずつ解明してきた。今後は、これらの職の下にある行政や軍隊の機構などについての詳細な分析を通じ、属州バビロニアに対するセレウコス朝及びアルシヤク朝の支配を構造的に解明していくこととした。

注

- (1) 三津間康幸「セレウコス朝及びアルシヤク朝支配下のバビロニアにおける將軍職」『オリエント』45-2 (2002), 26-55. 本稿におけるテキストの引用法、暦の表記法はこの論文に従う。ただし、ADRTB, BCHP 以外の略号は、アッシリア学関係は E. Reiner & M. T. Roth (eds.), *The Assyrian Dictionary of the Oriental Institute of the University of Chicago*, R, Chicago, 1999; 西洋古典学関係は S. Hornblower & A. Spawforth (eds.), *The Oxford Classical Dictionary*, Revised Third Edition, Oxford / New York, 2003 の略語表に従った。
- (2) セレウコス朝の属州（バビロニア）統治についての先行研究としては、三津間『オリエント』45-2, 48-49: n. 5 で挙げたものの他、J. D. Grainger, *A Seleukid Prosopography and Gazetteer*, Leiden / New York / Köln, 1997, 811-812, 814 がある。
- (3) A. J. Sachs & H. Hunger (eds.), *Astronomical Diaries and Related Texts from Babylonia* (= ADRTB), Wien, 1988-
ADRTB 1: Vol. 1, *Diaries from 652 B. C. to 262 B. C.*, Wien, 1988.
ADRTB 2: Vol. 2, *Diaries from 261 B. C. to 165 B. C.*, Wien, 1989.
ADRTB 3: Vol. 3, *Diaries from 164 B. C. to 61 B. C.*, Wien, 1996.
ADRTB 5: Vol. 5, *Lunar and Planetary Texts*, Wien, 2001.
- (4) 三津間『オリエント』45-2, 39-40, 43.
- (5) W. von Soden, *Grundriss der akkadischen Grammatik samt Ergänzungsheft zum Grundriss der akkadischen Grammatik*, Analecta orientalia 33/47, Roma, 1969, 150.
- (6) B. Meissner, *Beiträge zum assyrischen Wörterbuch*, Vol. 1, Chicago, 1931, 80: 37; A. K. Grayson, *Assyrian and Babylonian Chronicles*, Reprint of 1975 ed., Winona Lake, Indiana, 2000, 115a-b.
- (7) S. Smith, *Babylonian Historical Texts* (= BHT), London, 1924, 145, 153; cf. *ibid.*, 157; ハカーマニシュ Haxāmaniš 朝時代の日記にも「知事職 *mu-ma-'i-ir-ū-tu*」の語が

見える (-366A Col. ii 8)。

アレクサンドロス Alexandros III世時代の年代誌 (CT 37 22; Grayson, *op. cit.* [註 6], Chronicle 8) には、ファン・デル・スペク (R. J. van der Spek, “Darius III, Alexander the Great and Babylonian Scholarship,” in W. Henkelman & A. Kuhrt [eds.], *A Persian Perspective: Essays in Memory of Heleen Sancisi-Weerdenburg*, Achaemenid History 13, Leiden, 2003, 289-346, esp. 301-310 [模写, 翻字, 英訳]) によれば, 「[...]・ベール, 彼の息子を [...]の² 知事 [職] に [...] : [...]・⁴EN¹A-šá¹ a-na mu-ma-i-ir[⁴-tu...]」とあり (Obv. 14f.), 前 328/7 年, バビロニアのサトラップ・マザイオス Mazaios の死後, その息子をサトラップに任命したことを示すものである (*ibid.*, 306-307; cf. CT 37 22 [模写]; Grayson, *op. cit.* [註 6], Chronicle 8 [転写, 英訳, 写真])。

ディアドコイ Diadochoi 時代の例は, いずれも「ディアドコイ年代誌 (*ibid.*, Chronicle 10 [転写, 英訳, 写真]; BHT, 140-144 [転写, 英訳], Pls. XV-XVII [模写])」に確認される; アッカドの知事職: ¹⁶GAL.UKKIN-⁴tu^{kur}[URI^{k1}]: Obv. 3' (セレウコス, つまり後のセレウコス I 世); ¹⁶GAL.UKKIN-⁴tu^{kur}[URI^{k1}]: Rev. 30' (アルケラオス Archelaos: 名前については R. J. van der Spek, “Nippur, Sippar, and Larsa in the Hellenistic Period,” in M. de J. Ellis [ed.], *Nippur at the Centennial: Papers Read at the 35^e Rencontre Assyriologique Internationale, Philadelphia, 1988*, Philadelphia, 1992, 235-260, esp. 247 参照); アッカドの知事: ¹⁶GAL.UKKIN^{kur}URI^{k1}: Obv. 6', 10'; ¹⁶GAL.UKKIN^{kur}URI^{k1}: Obv. 9' (いずれもセレウコス); [...] の知事: ¹⁶GAL.UKKIN [...] : Obv. 18'; アッカドの [知事 (職)]: [...] ^{kur}URI^{k1}: Rev. 35'; エジプトの知事: ¹⁶GAL.UKKIN^{kur}Mi-sir: Obv. 4' (プトレマイオス Ptolemaios); アッカドの長: ¹⁶GAL^{kur}URI^{k1}: Obv. 16' (「アッカドの知事 ¹⁶GAL.UKKIN^{kur}URI^{k1}」の省略ないし書き落とし [cf. G. F. Del Monte, *Testi dalla Babilonia Ellenistica*, Vol. 1: *Testi Cronografici*, Pisa / Roma, 1997, 184: n. 301])。

デル・モンテによれば, アンティゴノス・モノフタルモス Antigonos Monophthalmos も「[アッカドの² 知事² ¹⁶UKKIN¹^k[^{kur}URI^{k1p2}]/[^{kur}URI^{k2}]]」と呼ばれている例があるという (この呼称についての解釈も含めて *ibid.*, 20-21 参照)。ただしこの説はファン・デル・スペクによって論駁されている (R. J. van der Spek, Review of Del Monte, *Testi dalla Babilonia Ellenistica*, Vol. 1: *Testi Cronografici*, *Orientalia* 69[2000], 433-438, esp. 435)。

- (8) H. Bengtson, *Die Strategie in der hellenistischen Zeit*, Vol. 2, Münchener Beiträge zur Papyrusforschung und antiken Rechtsgeschichte 32, München, 1944, 38-48, 73.
- (9) E. Bickerman, *Institutions des Séleucides*, Paris, 1938, 204-205.
- (10) ベンクトゾンはポリュビオスの叙述するモローン Molon という人物を, メディア Media のサトラップを兼ね, ユーフラテス以東を管領する「上部属州総督」とする (Bengtson, *op. cit.* [註8], 85-86)。

- (11) 詳細は三津間『オリエント』45-2, 48: n. 4 を参照。
- (12) W. Otto, *Beiträge zur Seleukidengeschichte des 3. Jahrhunderts v. Chr.*, Abhandlungen der Bayerischen Akademie der Wissenschaften, Philosophisch-philologische und historische Klasse, XXXIV. Band, 1. Abhandlung, München, 1928, 14.
- (13) 楔形文字文書中の「(アッカドの) 將軍 ¹⁰GAL *ū-qu / ū-qa* / ¹⁰GAL ERĪN-*ni* / ERĪN-^{meš} (^{kur}URI^{ki})」職の一例である。*rab uqu* はスミス (BHT, 157) がギリシャ語の官名ストラテegos *στρατηγός* の訳語とし、その説が一般に受け入れられている (三津間『オリエント』45-2, 28-40, 42-46 も参照)。この呼称中の「アッカドの」はしばしば省略される (*ibid.*, 38)。
- (14) Bengtson, *op. cit.* (註8), 73-74及び本稿II章における事例ivの拙訳を参照。
- (15) Bengtson, *op. cit.* (註8), 49-53, 78, 143-158, 190-193.
- (16) 三津間『オリエント』45-2, 39.
- (17) Del Monte, *op. cit.* (註7), 34-35, 53-57.
- (18) 三津間『オリエント』45-2, 28, 38-42.
- (19) 上部属州の範囲については Diod. Sic. XX 47 5 参照。
- (20) 正式な官名はギリシャ語碑文に現れる *ὁ ἐπὶ τῶν ἄνω σατρασιῶν*; 字義通りに訳せば「上部諸属州の上に立つもの」となる。
- (21) S. Sherwin-White & A. Kuhrt, *From Samarkhand to Sardis: A New Approach to the Seleucid Empire*, Berkeley / Los Angeles, 1993, 42, 46-47.
- (22) Grainger, *op. cit.* (註2), 811, 814.
- (23) 転写, 英訳, 写真 (一部に模写付属) は Grayson, *op. cit.* (註6) に収録。I. Finkel & R. J. van der Spek, *Babylonian Chronicles of the Hellenistic Period* (forthcoming) (= BCHP) に公刊予定の年代誌の翻字, 英訳, 写真は順次 <http://www.livius.org/cg-cm/chronicles/chron00.html> で公開。
- (24) 王名はほぼ Del Monte, *op. cit.* (註7), 213-259 に従ってバビロニアの支配者の名を記した。ただし, 事例 xxix の時点では, ゴータルズ Götarz I 世の身に變事が起こっていた可能性がある (春田 晴郎「アルシャク朝パルティアの一次史料—バビロン天文日誌第3巻の公刊—」『オリエント』41-2 [1998], 181-193, esp. 187 参照)。事例 xxx 以降は, ADRTB に公刊されていない日誌断片における例である。
- (25) この場合の「メソポタミア」の概念は現代におけるそれとは異なり, バビロニアを除く両河地方の北部を指す。この件に関しては岡田保良「『メソポタミア』についての覚え書」『ラーフィダーン』14 (1993), 267-274 も参照。
- (26) Sherwin-White / Kuhrt, *op. cit.* (註21), 44-46; Bengtson, *op. cit.* (註8), 17, 148-149 及び Grainger, *op. cit.* (註2), 811-812 も参照。
- (27) Sherwin-White / Kuhrt, *op. cit.* (註21), 44; Grainger, *op. cit.* (註2), 690.
- (28) 三津間『オリエント』45-2, 28.
- (29) 事例 73 (-87C 'Rev. 32'), 82 (-82B 'Obv.' 18'ff.), xxviii, xxix 参照。

- (30) 三津間『オリエント』45-2, 51: n. 35.
- (31) *Ibid.*, 38-39.
- (32) Cf. Bengtson, *op. cit.* (註8), 57, 86-88, 191; 更にティマルコスはベクトゾンによって「上部属州総督」を兼ねる者とされている。彼は後に王を僭称した。王としてのセレウキア等におけるコイン発行に関しては, A. Houghton, "Timarchus as King in Babylonia," *Revue numismatique* 6^e série 21 (1976), 212-217 参照; デーメトリオス Demetrios I 世と先王アンティオコス V 世のバビロニアにおける統治期間の間には, 粘土板文書から判断する限り, 前 162/1 年後半から 161/0 年にかけて間隙があり (Del Monte, *op. cit.* [註7], 240-242; R. J. van der Spek, "New Evidence from the Babylonian Astronomical Diaries Concerning Seleucid and Arsacid History," *AfO* 44/5 [1997/8], 167-175, esp. 167-168 も参照), その間にティマルコスの統治期間が位置すると思われる。
- (33) スミスは "the town magistrates of the king" と訳している (*BHT*, 156)。
- (34) エサギラの「議長 *šatammu*」及び「議会 *kiništu*」の成員達を指すと思われる (R. J. van der Spek, "The Astronomical Diaries as a Source for Achaemenid and Seleucid History," *BiOr* 50 [1993], 91-101, esp. 98)。
- (35) 書簡に応じて (おそらくは召集されて) セレウキアに行ったものであろう (*ibid.*, 98)。
- (36) ファン・デル・スベクによって提唱された読み (*ibid.*, 99)。かつては「ニップルの人々」^{la}[NIBRU]^{ki.meš}と読まれていた (*ADRTB* 1, 346-347)。
- (37) [*a-na ku-mu šib-tu₄* š] *ā É* LUGAL DÜ-uš: ファン・デル・スベクがレーマン・テクト (C. F. Lehmann-Haupt, "Noch einmal Kaššu," *ZA* 7 [1892], 328-333, esp. 330: nn. 1, 2) に基づいて復元した (van der Spek, *BiOr* 50, 99)。
- (38) *ā^p-na-tu₄^p* (Del Monte, *op. cit.* [註7], 27)。
- (39) ^m*Te-ru-nu*; ギリシャ名テーローン *Θήρων* を表記していると思われる (*ibid.*, 38)。
- (40) Bengtson, *op. cit.* (註8), 51.
- (41) van der Spek, *BiOr* 50, 99.
- (42) J. Black, A. George & N. Postgate (eds.), *A Concise Dictionary of Akkadian*, Wiesbaden, 2000², 423b.
- (43) *ū-sur-tū*: van der Spek, *Orientalia* 69, 437.
- (44) Del Monte, *op. cit.* (註7), 53.
- (45) 用例は M.-J. Seux, *Épithètes royales akkadiennes et sumériennes*, Paris, 1967, 305-308 参照。
- (46) Del Monte, *op. cit.* (註7), 226-227.
- (47) 同様の事例を含めて, 三津間『オリエント』45-2, 41-42 参照。
- (48) Del Monte, *op. cit.* (註7), 54.
- (49) グレイソン (Grayson, *op. cit.* [註6], 284a) は ^m*Lu²-mu-šá* と翻字した。しかし

これはグレイソンも認めるようにバビロニアの人名にも、ギリシャ名にも適合しない (*ibid.*, 284a)。ファン・デル・スペクは ^m[*Lu*²] MU-šá と翻字し、2 番目のサインは名前 (ギリシャ名) の短縮形であろうと考える (他の名前の短縮形も含め、R. J. van der Spek, “The Babylonian Temple during the Macedonian and Parthian Domination,” *BiOr* 42[1985], 541-562, esp. 557-558 参照)。セレウコス III 世の没年 (前 223/2 年) には、王弟であり、「上部属州総督」であったと思われる、後のアンティオコス III 世が東方にやってくる (Polyb. V 40 5; Jer. *Commentariorum in Daniele* XI 10; cf. van der Spek, *BiOr* 42, 557)。また、王位につく前の彼は別の名を名乗っていた可能性もあり (*ibid.*, 557), *Lu* というサインが正しいとしても、彼のことを指す可能性までは否定されない。

- (50) ^{id} *Ma-rat-ta*: *ibid.*, 558; Del Monte, *op. cit.* (註 7), 206.
- (51) ファン・デル・スペクによれば郊外の現地住民を指す (van der Spek, *Orientalia* 69, 433-434)。
- (52) 三津間『オリエント』45-2, 40.
- (53) *Ibid.*, 39-40.
- (54) 同様の可能性は、以前の拙稿で「大將軍 (前110年代に『4 將軍の上に立つ將軍』を代替した職 [*ibid.*, 45-46])」の司法権の行使の根拠とした (*ibid.*, 46) 事例 81 (-82B Rev.' 4²-6^f.') に関しても存在する。
- (55) Cf. *ADRTB* 3, 234-235; Del Monte, *op. cit.* (註 7), 129.
- (56) ^{kur}A[^{mes}šá-an (**Mēšan*)] という補いは「メセーネーの運河 ^{id}A^{mes}šá-an (-125A Obv.' 15)」「メセーネーの A^{mes}šá-nu-ú (-132B Rev. 19 *et passim*)」という表現から類推した (この地名については Del Monte, *op. cit.* [註 7], 117 も参照)。
- (57) -132D₁ 'Rev.' 30': ITU BI ^{gš}MA^{mes}šá KU₄^{mes}ana KARAS LUGAL EN ^{kur}A[^{mes}šá-an ...]。
- (58) Plin. *HN* VI 139; cf. Bengtson, *op. cit.* (註 8), 191-192: n. 2; M. Schuol, *Die Charakene: ein mesopotamisches Königreich in hellenistisch-parthischer Zeit*, Oriens et occidentis 1, Stuttgart, 2000, 106-109.
- (59) このことについては 2002 年 3 月、春田晴郎氏よりご指摘を賜った。
- (60) ヒュルカニアの事例: -140C Obv. 34; メディアの事例: -137A 'Rev.' 9'; -136C 'Obv.' 3'; -119A₂ 19²; -93A Rev.' 23; -77A 'Obv. 31'.
- (61) このような陣営は、時には遠征の最中に貨幣を発行したと思われる (D. Sellwood, *An Introduction to the Coinage of Parthia*, London, 1980², 98; G. R. F. Assar, *A Revised Parthian Chronology of the Period 141-54 B.C.*, http://www.parthia.com/Private/revised_chronology.pdf, 2003, 60 参照)
- (62) *nu-up-tu₄* (Del Monte, *op. cit.* [註 7], 140)
- (63) デル・モンテやシュオルは別様に解釈している (*ibid.*, 116; Schuol, *op. cit.* [註 58], 295 参照)。

- (64) Aryabōžan (^mAr-'a-a-bu-za-na-a) というイラン名 (春田『オリエント』41-2, 185)。
- (65) そのアルシャク朝時代の権限については、三津間『オリエント』45-2, 42-46 参照。
- (66) アルシャク朝時代にはその管領する領域は属州バビロニアのみに縮小されていたと思われる (アルシャク朝時代の「4 将軍の上に立つ将軍」については、*ibid.*, 42-45 参照)。
- (67) *Ibid.*, 53: n. 58.
- (68) Del Monte, *op. cit.* (註7), 135-136.
- (69) 春田『オリエント』41-2, 185; 三津間『オリエント』45-2, 45.
- (70) Del Monte, *op. cit.* (註7), 243-245 及び van der Spek, *AfO* 44/5, 173a: n. 28 参照。
- (71) ^l₀GAL ERĪN^{meš}[šd?]-nu-ū
- (72) 原文 *ma-tu-qa* は続く「4 将軍の上に立つ将軍」テオドシオス Theodosios 任命の記事 (事例 41 [-132B Rev. 23-25]) から見てここでは解任を示すものと思われる。テル・モンテの訳は *era stato deposto* (Del Monte, *op. cit.* [註7], 125)。
- (73) -132A 'Obv.' 3': [... UG]U 4 ^l₀GAL ERĪN^{meš} TA E^{ki}f^l[...].
- (74) *ADRTB* 5, 64; Assar, *op. cit.* (註61), 9-12; cf. *LBAT* 1441; T. G. Pinches, J. N. Strassmaier & A. J. Sachs, *Late Babylonian Astronomical and Related Texts*, Providence, 1955, xxxiii; 三津間康幸「ヒメロスの役職について」『オリエント』46-1 (2003), 191-196.
- (75) Assar, *op. cit.* (註61), 13-14; 三津間『オリエント』46-1, 193.

後 記

本稿は平成16年度文部科学省科学研究費 (特別研究員奨励費) による研究成果の一部である。

表 1: セレウコス朝及びアルシヤク朝支配下のパピロニアにおける知事職

No.	テクスト	王名 (知事名)	年 代	呼 称	事 項
i	BCHP 7 Obv. 4'	セレウコス I 世 ²	イブソスの 戦い (前301 年) に関係 ²	アッカドの知事: ¹⁰ GAL.UKKIN ^{kur} URI ^k ["]	不明
ii	BCHP 7 Obv. 8'	セレウコス I 世 ²	イブソスの 戦い (前301 年) に関係 ²	アッカドの [知事]: [... ^k urURI ^k]	バビロンの住民達 [への] 王の命令 (UMUŠ ^š LUG[AL ana] ¹⁰ DUMUŠ E[" ¹⁰]) と関係 ²
iii	-273B 'Rev. 34'-38'	アンティオコス I 世	前276/5年- 前275/4年 夏 ² 月	アッカドの知事: ¹⁰ mu-ma-i-ir ^{kur} URI ^k a (34', 36')	前276/5年にサルティスの王の方に行っていた知事と王の <i>paqdu</i> 達が翌年夏月セレウキアに戻る。彼らは皮の書簡をバビロンの住民達に送り、12日、バビロンの住民達がセレウキアへやってくる。同月、前280/79年に王の命令でバビロンの人々、ボルシッパの人々、クタの人々に支給されていた土地や王の命令で諸市と諸祠堂に与えられ住民達の自由にされていた家畜など全てのものを、国庫の収税 / 徴集対象とする。
iv	-273B 'Rev. 30'-32'	アンティオコス I 世	前274/3年 夏 ² 月	アッカドの知事: [" ¹⁰ mu-ma-i-ir ^{kur} URI ^k a (30')	24日、バビロンとセレウキアから大量の銀、服、財産、器具、バクトリアの知事が送ってきた20頭の象を川向こう (シリア) の王に対して送り出す。
v	-261C 'Rev. 9'	アンティオコス I 世 (テローロン)	前262/1年 夏 ² 月	アッカドの知事: ¹⁰ GAL.UKKIN ^{kur} URI ^k a	バビロニアにおける <i>paqdu</i> 達と共に に言及
vi	Grayson, <i>op. cit.</i> [註 6], Chronicle 13b 14'-15'	セレウコス III 世	前224/3年	邦 (アッカド) の [知] 事 (括弧内筆者) [" ¹⁰ GAL]UKKIN KUR	王の兄弟がセレウキアに入った際、 その前で邦の民 (¹⁰ UN ^{mes} KUR) と 共に象を養す。

vii	-178C 'Rev. 18'	セレウコスIV世	前179/8年 Ⅻ月	4知基の上に立つアッカドの將軍: ¹⁰ GAL ERIN ^{kur} UR ^{ki} meš šd ana UGU ⁴ GAL UKKIN ^{meš} (下線筆者)	4知基の上に立つアッカドの將軍: ¹⁰ GAL ERIN ^{kur} UR ^{ki} meš šd ana UGU ⁴ GAL UKKIN ^{meš} (下線筆者)
viii	App. Syr. VII 45, 47 Diod. Sic. XXXI 27a	アンティオコスIV 世-アンティオコ スV世 (ティマル コス)	前164/3年 IX月以前- 前162/1ま たは161/0 年	バビロンにおけるサトラペース <i>σατραπὴν ... ἐν Βαβυλῶνι</i> (App. Syr. VII 45) メディアのサトラペース <i>σατραπὴς ... Μηδίας</i> (Diod. Sic. XXXI 27a)	アンティオコスIV世によりバビロニ ア ² (ディオドロースによればメディア ア)のサトラペースに任命される。 後に王を尊称し、デーメートリオス I世により殺される。
ix	-158B 'Rev. 17'-Upper e. 1	デーメートリオス I世	前159/8年 IV月	アッカドの知事: ¹⁰ mu-ma-i-ir ^{kur} UR ^{ki} (17); [アッカドの] 知事: ¹⁰ mu-ma-i-ir ^{kur} UR ^{ki} (22) (22')	6日、セレウキアからバビロンに入 る。19日、セレウキアへ向けてバビ ロンを出発する。
x	-137D Rev.' 22-24	フラハート II 世	前138/7年 X月	アッカドの知事: ¹⁰ mu-ma-i-ir ^{kur} UR ^{ki} (22)	王の陣営から出て、5日バビロンに入 る。エサギラの君子の門で犠牲献 を用意され彼が捧げる。
xi	-133B 'Obv. 22'-26'	フラハート II 世	前134/3年 Ⅺ月	[この'] アッカドの知事: ¹⁰ mu-ma-i-ir ^{kur} UR ^{ki} [MU-a-ti] (22'-23') このア[ッカドの知事]: [¹⁰ mu-ma-i-ir ^{kur} UR ^{ki} MU-a-ti] (25')	10日以前、バビロンに入る。10', 15 日の2度、エサギラの君子の門で犠 牲献を用意され彼が捧げる。その後 ユーフラテス河畔のどこかへ向け て出発する。
xii	-133B Rev.' 18-21	フラハート II 世	前134/3年 Ⅻ月	アッカドの知事: ¹⁰ mu-ma-i-ir ^{kur} UR ^{ki} (18); こ[のアッカドの知事]: [¹⁰ mu-ma-i-ir ^{kur} UR ^{ki} MU]-a-ti (18); アッカドの知事: ¹⁰ mu-ma-i-ir ^{kur} UR ^{ki} (20)	28日より前 ³ にセレウキアへ向けて バビロンを出発する。29日、セレウ キアからどこかへ向けて出発する。 ⁴
xiii	-132B Obv. 27-28	フラハート II 世	前133/2年 VI月	このアッカドの知事: ¹⁰ mu-ma-i-ir ^{kur} UR ^{ki} ^{meš} MU-a-ti[<i>sic</i>] (28)	エサギラの <i>duše</i> 門 (カ-シキラ) の 前で犠牲献を用意され、捧げる。 ⁵ 16 日、セレウキアに向かってバビロン を出発する。 ⁶

xiv	-130B 'Rev.' 6'	フラハート II 世	前131/0年 IV'からVI' 月のいずれ か	[...] の知事: ¹⁰ mu-ma-i-ir [...]	不明 (1 日の出来事)
xv	-129A, 'Obv.' 6'	フラハート II 世	前130/29年 I 月	アッカドの知事: ¹⁰ mu-ma-i-ir ^{kur} URI ^{ki}	4 日, 王の陣営からバビロンへ入る。
xvi	-129A ₂ 'Obv.' 16'	フラハート II 世	前130/29年 II 月	アッカドの知事: ¹⁰ mu-ma-i-ir ^{kur} URI ^{ki}	10日, どこか (王の陣営) からどこかへ向かっての行動
xvii	-129A ₃ 'Rev.' 14'-17'?	フラハート II 世	前130/29年 IV 月	アッカドの知事: ¹⁰ mu-ma-i-ir ^{kur} URI ^{ki} (14', 17')	5 日と17日の出来事
xviii	-125A Obv.' 15	アルタバーン I 世	前126/5年 I 月	アッカドの知事: ¹⁰ mu<-ma>-i-ir ^{kur} URI ^{ki}	2 日, バビロンを出る。
xix	-124A 'Rev.' 6'	アルタバーン I 世	前125/4年 IV 月	アッカドの知事: ¹⁰ mu-ma-i-ir ^{kur} URI ^{ki} [sic]	23 日, セレウキアからバビロンに入る。
xx	-124A 'Rev.' 18'	アルタバーン I 世	前125/4年 V 月	アッカドの知事: ¹⁰ mu-ma-i-ir ^{kur} URI ^{ki}	不明
xxi	-124B 'Obv.' 3'-5'	アルタバーン I 世	前125/4年 VIII 月	アッカドの [知事]: [¹⁰ mu-i-ma]-ir ^{kur} URI ^{ki} (4') アッカドの知事: ¹⁰ mu-i-ma-i-ir ^{kur} URI ^{ki} [sic] (4')	何者かと共に王の陣営からセレウキアへ入り, 16日, 単独でセレウキアからバビロンに入る。エサギラのラマッス-ラビ門の前で犠牲獣を用意され, 捧げる。
xxii	-124B 'Obv.' 19'-20'	アルタバーン I 世	前125/4年 IX 月	アッカドの [知事]: [¹⁰ mu-i-ma]-ir ^{kur} URI ^{ki} (20')	セレウキアに行き, メセーネーの王子をアルタバーン I 世の命令により父アスバシネーのもとに送還する。
xxiii	-123B 'Flake' 15'	アルタバーン I 世	前124/3年 VI 月	[...] の知事: ¹⁰ GAL-UKKIN KUR 'x' [...]	犠牲獣を用意される。

xxiv	-112 Obv.' 14-16	ミフルダート II 世	前113/2年 VII 月	[アッカ]ドの知事: ¹⁶ GAL.UKKIN ^{kur} U[RI ^{ki}] (14)	2 日, バビロンに入る?。エサギラの 君子の門で犠牲献を用意され, 捧げ る。その後セレウキアへ向けて出発 する。
xxv	-111B 'Rev.' 8'-10'	ミフルダート II 世	前112/1年 IV 月	アッカドの知事: ¹⁶ mu-ma-i-ir ^{kur} UR ^{ki} (8') アッカドの知事: [¹⁶ mu]-ma-i-ir ^{kur} UR ^{ki} (10')	何者かと共にセレウキアからバビロ ン ² に入る。エサギラの君子の門で犠 牲献を用意され, 彼らが捧げる。
xxvi	-109A 'Obv.' 13'	ミフルダート II 世	前110/09年 VII 月	アッカドの知事職に任命された [...] ¹⁶ mu]-ir-nu-ut ^{kur} UR ^{ki} mun-nu-6	2 日以降 ² , 知事職に任命された何者 かの行動
xxvii	-109B 'Obv.' 7'	ミフルダート II 世	前110/09年 VII 月	アッカドの [知事] 職: [¹⁶ mu-ir]-nu-ut ^{kur} UR ^{ki}	19日以降 ² , セレウキアへ向かっての 行動?
xxviii	-96A 'Flake' 12'-13'	ミフルダート II 世	前97/6年 I 月	アッ [カド] の知事: [...] ^{kur} UR ^{ki} (行動から推 測, デル・モンテは「アッカドの将軍」とする [Del Monte, <i>op. cit.</i> [[註 7]], 164])	17日以降 ² , 王の陣営からセレウキア へ向かっての行動
xxix	-86A 'Obv.' 9'	ゴータルズ I 世	前87/6年 II 月	[アッカ]ドの知事: ¹⁶ GAL.UKKIN ^{kur} U[RI ^{ki}]	18日以前 ² , 将軍と共にセレウキアと 関係する行動をとる。
xxx	LBAT 615 4'	不明	不明	[...] の知事: ¹⁶ mu-ma-i-ir [...] ^{kur} UR ^{ki}	不明 (23日の出来事?)
xxxi	LBAT 685 10'	不明	不明	アッカドの [知事? / 将軍?]: [...] ^{kur} UR ^{ki}	バビロンからの行動?
xxxii	LBAT 722 2'	不明	不明	アッカドの [知事? / 将軍?]: [...] ^{kur} UR ^{ki}	セレウキアへ向かっての行動?
xxxiii	LBAT 835 10'-11'f. (-124B と関係?。事例 xxi の呼称参照)	不明	不明	[アッカドの] 知事: ¹⁶ mu-i-m[^{a-ir} ^{kur} UR ^{ki}] [sic] (10') [アッカドの] 知事: ¹⁶ mu[-i-ma-ir ^{kur} UR ^{ki}] (11')	10日の出来事(10') アッカドの知事への犠牲の用意へ の言及(11')